

# 現代日本のプロテスタント・キリスト教 教育理論の変遷

深 谷 潤

Protestant-Christian Education : Theories and Changes  
in Modern Japan

Jun Fukaya

## はじめに

今から60年以上前の1950年、カナダのトロントで第13回世界キリスト教教育大会が開催された。戦後間もない時期、連合軍の支配下に置かれていた日本で、どのようなキリスト教教育が行われていたのか、大会のためにその報告書が作成された。実に全国1431校の教会学校を対象に1949年4～7月にかけて、大規模な調査が行われたのである。調査にあたった研究者は、総勢80名。その中には、北森嘉蔵、小林公一、松川成夫、高崎毅、田浦武雄、武田清子等の名前が見られる。その報告書によれば、「キリスト教教育」という日本語の概念自体がまだ充分熟しておらず、「日本のキリスト教教育は今日どんな原理に立脚しているか」を取扱うことが困難であると指摘されている。さらに、漠然と聖書を中心に教える以上のことは自覚されていないものが多いと思われる、とも捉えられていた。

その報告書は6部から構成されており、その第4部のキリスト教教育の原理では、日本のキリスト教教育は、伝道的事業 (Missionary Enterprise) として始められており、アメリカの宗教教育学の影響にあったと言われている。1930年代後半から、ドイツの弁証法神学の影響を受け、さらに、それが形式的に教

会のキリスト教教育に適用されてしまったと指摘されている。その問題の解決もしないまま戦争に入り、再びアメリカの影響を受けて変化していると言う。つまり、戦後のキリスト教教育は、欧米の宗教教育の影響を強く受けつつ、日本独自のキリスト教教育の在り方を模索するところから出発したと言える。

本稿では、日本のキリスト教教育を論じるための理論自体が十分に熟していない時期から、今日にいたるまで、キリスト教教育はどのような原理、理論に基づいてきたのか、その変遷を大まかに探ることを試みるものである。キリスト教教育の歴史的研究は、キリスト教学校教育同盟の百年史（2012年）を始め、NCC『教会教育の歩み』（2007年）、それに日本キリスト教教育学会『戦後50年のキリスト教教育』（2003年）など、数多くある。しかし、理論の変遷を概観するものは極めてまれである。そこで、2013年、拙書『現代日本のプロテスタント・キリスト教教育理論の変遷－キリスト教教育哲学の視座から－』が出版された。今回は、その前半の一部分を参考に、キリスト教教育理論の変遷について説明する。

初めに形式的な議論が必要と思われる。キリスト教教育は、例えば、教会学校やミッション・スクール、幼稚園・保育園での礼拝である場合、実践として具体的に展開しているものである。その方法や目的、内容などを整理し、共通項を見出し、個別のケースに応用可能にしていくための原理を仮に理論とするならば、キリスト教教育の理論は、複数の学問によって総合的に構造化されねばならない。キリスト教教育が、学問として成立するか否かをここで議論する余裕はない。しかし、戦後の理論の変遷を概観して、明らかになってきたことは、キリスト教教育が、神を中心とした学問（神学）と人間を扱う学問（教育学、諸科学）の狭間に合って、総合的なアプローチを必要としつつ、なおかつシンプルな結論を求めていることである。すでに奥田和弘の『キリスト教教育を考える』（1990）によって、「キリスト教教育理解の類型」5つ（教授中心、発達中心、解釈中心、活動中心、共同体中心のアプローチ）が紹介されているが、その基盤は、1987年に翻訳されたジャック・L.シーモア編集の『キリス

ト教教育の現代的展開』であると記されている。

繰り返すが、ここで試みる理論の捉え方は、歴史的に日本の戦後のキリスト教教育の諸理論が、どのような特徴をもち、どのような流れを形作ってきたのかを明らかにすることを意図している。それらは、次の三つのグループに分けられる。第一グループは、教会における伝道を中心とした理論。これは、端的に言うならば、クリスチャンを育てるための理論である。第二グループは、キリスト教教育を学問論から考察するものである。神学を中心とするもの、また、さらに心理学や教育学、倫理学など多様な学問との関係の中からキリスト教教育の学としての性格づけをするものである。第三グループは、人間教育を中心としたものである。これは、教会やキリスト教学校での伝道と一線を画しているところが特徴である。以下、各グループの概要を説明する。

## 1. 伝道中心の理論：「キリストの形」を形成する

歴史的に、第一グループの理論が最も古く、かつ多くある。キリスト教教育の実践面で有効な働きをもったものに、「総合制カリキュラム（通称：神の民カリキュラム）」があった。それは、1959年に教会学校の教師達向けの「教科書」として大きな役割を果たした。研究面では、1958年に『キリスト教教育講座』（高崎毅・太田俊雄監修、新教出版社）が4巻本で発刊された。その中で、太田俊雄は、信仰告白を境にキリスト教教育を二つに分ける理論を提示している。つまり、回心前の人を対象とした教育を「教育的伝道（educational mission）」と呼び、その後の教育を「信徒訓練」、あるいは「教育的牧会」と捉え、この二つを合わせて「キリスト教教育」と定義した。北森嘉蔵もこれとくわめて似たモデルを示している。彼は、前者を「狭義のキリスト教教育」とし、信徒訓練も含め、全体のプロセスを「キリスト教的人間形成」と呼び、それが「広義のキリスト教教育」である、と考えた。

このモデルは、高崎毅が説明するように、キリスト教教育が、「教会の機能」として働くものである、という考えにのっとったものである。これは、キリスト教教育が、教会の中で子どもを対象とした一部の分野として、領域的に捉えられるものではなく、教会のすべての業（働き）によって、人間の中に「キリ

ストの形」が形成されることを意味していた。この「キリストの形」の形成を目的とすることは、同年（1958）の小林公一の理論にも見られる。小林公一は、キリスト教教育は、福音に基づく教育であり、教会を基盤とすると考えている。そして、その教育は、福音を内容とし、聖霊の働きによってキリストの形を形成することを目的とするものである。（小林公一『キリスト教教育』日本YMCA同盟出版部 1958年）彼の考えで看過できないことは、キリスト教教育の学問的基礎を「教育学の基礎学、隣接する学問の上に打ち立てられなければならない」と考え、社会学、人間学、哲学、神学を基礎とした「キリスト教教育学」を提唱していることである。キリスト教教育が、学問として神学を中心とすべき、という後の大木英夫らの主張と比べると、1950年代にすでにこの提案をしていることは注目すべきことだと思われる。

さて、伝道と教育の関係をどう捉えるかが、キリスト教教育を考える大きな課題であった。戦前にC.H.ドットによって紹介された「ケリュグマ（宣教）」と「ディダケー（教育）」の区分は、未信者に対する宣教と信者に対する教育、のように単純な機能分化につながっている、との批判も出た。先述の「教育的伝道」という表現もあるように、教育の扱う範囲が限定的ではないこと、さらに、一般教育に対しても、「手段」として教育的伝道が用いられうることを高崎は指摘した。しかし、教育を手段と関連付ける思考法は、後にキリスト教教育の意味づけを限定的にする作用をもったのである。

## 2. キリスト教教育を学問的に位置づける理論

さて、伝道中心の理論は、教会教育の柱となりつつ、ミッション・スクール、現在のキリスト教学校の理論として別の側面を見せていく。1987年に出版された『教育の神学』（ヨルダン社）がその代表的な例と言えるであろう。周知の通り、「教育の神学」というタイトルは、P.ティリッヒの論文にもある。しかし、これは学校伝道研究会が編集した多くの現場のキリスト教教育に関わる教師や研究者による論文集である。以後2度（1997、2006年）にわたって続編が刊行されている。学校伝道研究会は、小倉義明元会長が序文で書いている

が、教会は伝道に専心すべきであり、学校事業に携わるのは本分からはずれる、との認識があり、他方、学校はあくまで学校であり、教会ではない、との主張があると言う。この研究会はその相克の中から生まれたもの、と言われている。そのため、単独の教育の神学が存在するわけではなく、教会や学校などのキリスト教教育の現場や理論に基づいた多様な立場がある。そこで、筆者は、それらの立場の中で、論文の題名も同じく「教育の神学」とある、大木英夫の論文に注目した。

さて、この論文では、キリスト教教育が学問として神学に基づかねばならないだけでなく、教育学ではなくて神学の訓練を受けたものが、キリスト教教育を実践しなければならないと説いている。さらに、神学を中心にしなければキリスト教教育は実践面でもさしさわりがある、という主張のように思える。牧師の立場では、当然であろう。彼の他にも、古屋安雄の『大学の神学』（1993年）など、神学を前提に据えてキリスト教教育を学問的に研究する立場がある。その際、教育は、中心から外れたところに置かれる可能性がある。現に、大木は、キリスト教教育は、「特殊教育分野」と見なしている。つまり、「キリスト教教育学」ではなく、神学におけるキリスト教教育、言い換えれば、実践神学としてのキリスト教教育、という捉え方である。これは、そのまま東京神学大学のカリキュラムに反映されている。東京神学大学の性格から見れば、当然のことと言えよう。しかし、見方を変えれば、キリスト教教育が、神学の手段とされている、とも言える。それは、教会のもつ伝道の教育的機能として、キリスト教教育が行われ、それが学校や園、家庭、キリスト教団体に拡張していくことを意味している。

他方、日本でキリスト教教育が神学の応用分野や伝道的手段としてではなく、教育を神学の根本的課題に位置付ける努力が開始された。その最初の研究は、山内一郎の『神学とキリスト教教育』（1973年）である。彼は冒頭で、「キリスト教教育の問題を、単にその方法と技術を問うことにとどまらないで、本質論として取り上げ、その神学的根拠を究明し、そこから新しい状況の変化に即応したストラテジーを打ち立ててゆく作業は、キリスト教のミッションを実現

してゆくために根本的に重要かつ緊急の課題である」と述べている。山内の著作は、3部構成になっていて、主に欧米のキリスト教教育理論を分析解説している。それらを踏まえて、山内は、聖書理解について一つのモデルを示している。それは、聖書のテキストを理解する際、神学と教育学が「タテ糸とヨコ糸」の関係をもっていることである。これは、ティリッヒの「究極的な実在 (ultimate reality)」をブーバーの「我と汝 (Ich und Du)」における神との出会いに関連させ、さらにハイデッガーの「脱自的存在 (ek-sistent being)」に触れることを通して、神との出会いの経験を神学的課題から教育学、哲学の枠組みを通して問い直す道筋を示している。詳細は割愛するが、ここで重要だと思われるのは、キリスト教教育を学問的に考察する際に、神学だけが中心軸と考えられてはいると言っていることである。教育学がその対抗軸と捉えられ、両者の接点にキリスト教教育の本質を見ようとする試みと解釈され得る。彼は、さらにヘルバルト派の教授論の意義を捉えている。聖書テキストとの出会いは、導入・提示を、言葉の下における対話を理解、展開に、言葉への応答を伝達、応用に三段階のテキスト理解を試みている。

キリスト教教育の学問的位置付けを中心とした理論の中には、神学者の佐藤敏夫の「キリスト教文化倫理学」(1987年)がある。それは、拙書では、「教育の神学の代表的理論」として批判・考察した。この立場も、大木と同様、キリスト教教育を伝道する手段として位置付けているので今回は割愛する。

佐藤の後、キリスト教教育の学問的位置付けを試みた研究に吉岡良昌の『キリスト教教育研究—信仰に基づく人間形成—』(1994年)がある。彼は、キリスト教教育が、教会の教育をそのまま拡張するのではなく、広く一般教育を視野に置くべきであると考えている。それだけでなく、学校教育方法論(グループ)や人間の発達論(エリクソン)の理論をキリスト教教育の実践と結びつけて論じている。キリスト教教育が心理学分野と結びつけて研究された例は、すでに1962年の日本基督教団宣教研究所第三分科会が編纂した『キリスト教幼児教育の原理』がある。けれども、それは教会における伝道を目的としたものであり、教会以外の教育を視野に置いたものとしては、吉岡の研究が本格的な

ものである。ただし、彼もキリスト教教育を神学の一分野として実践神学の中に含めて考えている。その点では、伝道中心の理論と重なるものと言えよう。

### 3. 人間教育を中心とした理論

最後に、第三グループ、人間教育を中心としたキリスト教教育理論を説明する。この理論の特徴は、キリスト教教育を教会の伝道的手段としてではなく、さらに公教育においても本質的な意味を持ったものと捉えることである。つまり、第一、第二グループを総合した理論とも言える。ただ、一点大きく異なるのは、1950年代にみられたキリスト教の伝道のため、と声高に言わなくなったことである。教育目的が、伝道・宣教目的に優先する立場とも言える。教会の信仰共同体の形成理論ではなく、学校の教育共同体の中心的役割を担う理論が1990年代になって登場した。

先に触れた奥田の『キリスト教教育を考える―「共育」を求めて―』では、従来の伝道を中心とした理論とは異なる日本のキリスト教教育の可能性を探っている。具体的に、キリスト教学校教育が、キリスト教学校だけではなく、一般の公教育についても視野に入れ、「一般教育に欠けている視点を教育の中に持ち込み、そこから人間と社会を見つめ直し、人間性回復のための努力を行うこと」が今後のキリスト教教育の課題であると結論付けている。

このような奥田の考えは、吉岡がキリスト教教育を実践神学の立場から捉えていたのに対して、教育学の立場から捉え直したのものとして大きな意義をもっている。公教育を視野に入れるキリスト教教育の在り方自体は、決して新しくはない。伝道中心の理論にもあるが、そこでは、あくまで公教育は「異教の地」と捉えられていた。その中で、「キリスト教主義」の教育である、と主張することが必要だったのである。しかし、実際には、信仰共同体の形成の場である教会学校に公教育の学校制度を取り込んできた経緯がある。奥田は、この「学校化」の流れから脱し、キリストに根差した教育の在り方を検討している。彼は、自らの著書でJ.ファウラーの信仰発達理論を紹介している。しかし、議論の中心が教会教育を想定したものである点は、否定できない。キリスト教教育の目的が伝道のため、と言わないものの、共同体の中で信仰を育成すること

を目指していることは、明らかである。

教育学からキリスト教教育を論じる流れは、松川成夫（日本キリスト教教育学会初代会長）の「キリスト教に基づく教育」（1993年）において、さらに明らかになった。

「キリスト教に基づく教育」は、関西学院大学のキリスト教主義教育研究室創立25周年の記念講演会として、当時東京女子大学教授の松川成夫が行った講演のタイトルである。その副題に「日本の教育におけるその意味と役割」とあるように、日本の一般の教育を視野に置き、さらにキリスト教教育がどんな意義と使命をもっているかを論じる内容であった。（原文は、関西学院キリスト教主義研究室年報 No. 22「キリスト教主義」（1993年）の巻頭に載せられている。）彼の理論は、後に「キリスト教に基づく教育を考える」という論文に掲載されている。（『キリスト教学校の再建』（教育の神学 第2集）学校伝道研究会編 聖学院大学出版会 1997年 pp.94-111）

彼の主張は、キリスト教学校が教育をあくまで目的とする組織体であり、学校を伝道のための手段とすべきではないことである。異教の地で、キリスト教主義に立って伝道するかつてのミッション・スクールと異なり、キリストの福音に根差し、「本当の人間形成」を目的としたものが、キリスト教に基づく教育の意味である、と言う。教会は、学校の設立に責任をもち、教育機関として機能するよう配慮する努めがある。けれども、キリスト教学校におけるキリスト教教育は、従来のように教会の教育的機能を直接拡張したのではなく、あくまで教育共同体としてキリスト教教育目的の実現、それは、「福音に根差しした真の人間教育」を目指したものである。それ故、信仰をもたない教職員もその仕事を担うことができると考えられる。教会のように信仰育成を目的とするのではなく、学校は人間形成をする場だからである。

キリスト教教育の現場、実践面では、すでにあったかもしれないが、松川の理論によって、伝道と一線を画した、信仰育成を目的としないキリスト教教育が、初めて研究の対象として登場した、と考えられる。その背景には、キリスト教学校におけるクリスチャンの減少と、その対応がある。キリスト教教育に



においてクリスチャンが少ないという指摘は、過去の記録では1959年のキリスト教学校教育同盟の報告書の中にもある。「(…)学校は世俗化の波にさらされている(…)「キリスト教教師の少なさ」正確な統計は残念ながら手元にないが、現在でも、クリスチャンが教職員全体の3割に満たない学校が大半ではないであろうか。

松川の立場を応用するならば、教会に行かないキリスト教に理解ある教職員(「キリスト教シンパ」)をキリスト教教育に積極的に関与させる道筋を示すこと、さらにクリスチャンも含めた、キリスト教の広い意味での教養を習得する機会を教育共同体のプログラムとして用意することなどが考えられる。

## おわりに

以上、三つのグループの説明をしてきた。最後に、これからキリスト教教育の理論研究の方向性について、筆者の考えを3点述べたい。

第一に、戦後約60年の理論の変遷を振り返って、伝道から徐々に人間教育へと移ってきたことが分かる。しかし、筆者は伝道の理論は決して軽視されるべきではなく、しっかりと教会教育の中で継続してもらいたいと願っている。そうでなければ、クリスチャンの存在自体がなくなってしまう、キリスト教学校の中の要となる人間が抜けてしまうからである。その結果、キリスト教教育は、キリスト教の文化や知識の伝達のみで終始し、最も重要な人格的交わりが抜け落ちた教育に陥りかねない。

第二に、「キリスト教の価値観に共感し、理解を示す者」(キリスト教シンパ)の位置付けとキリスト教教育への参与のための理論の形成である。「教会クリスチャン」という言葉(内村鑑三)があるが、反対に何らかの個人的理由で教会に行かない、行けないクリスチャン(自称も含め)も存在する。また、洗礼を受けていなくとも、心の中では自分は信仰をもっている、というK.バルトが最も嫌う「クリスチャン」もいるであろう。それらは「キリスト教シンパ」(松村克己)に属すると考えられる。このような潜在的なシンパ、クリスチャンらが、キリスト教学校において、十分に生かされるためにどのような仕組み、工夫、理論が必要なのかを原理的に考えることが求められている。すでに、ノ

ンクリスチャーの教師が、学校礼拝で講話をする、という実践が行われているところもある。それが、神学的に、教育学的にどう説明されるのか、すでに「学校礼拝」に関する論文はあるが、「キリスト教シンパ」の観点から、さらに研究の蓄積が必要と考える。

第三に、学校教育における宗教教育の意味づけを道德教育との関連で、改めて考察することである。現在、道德の教科化の準備が進められている。キリスト教学校では、「宗教」は教科として残されるようである。しかし、道德に代わるものとして、宗教をこれまで行ってきたにもかかわらず、さらにキリスト教学校では、道德を必修科目として教えなければならない事態となりはしないだろうか。\*

「宗教なしにどうやって道德がおしえられるのですか？」と新渡戸稲造は、ボン大学留学中にベルギーの法律家から質問された。彼は即答できず、しばらくして『武士道』をその答えとして著作したことは、よく知られている。キリスト教学校で、文科省指定の教科書を用いた道德を教えることと、聖書科の授業を教えることに、原理的に全く関係をもたせないことが、果たして可能であろうか。現在、「道德の時間」は、公立学校の道德教育の「要」となっている。キリスト教学校の要は、キリスト教教育であり、学校礼拝だが、道德を必修とした場合、果たして要は二つになってしまうのであろうか、\*\*など、心配な点が多くある。このような原理的問題をどのように理論的に解決していくのか、大きな課題だと考える。

以上、3点が少なくとも現在見えている課題である。

(\* \*\* 発題後の討論の中で、私学であるキリスト教学校に、宗教の他に、さらに道德が教科として追加され、2科目設置される可能性は皆無であることが貝塚茂樹（武蔵大学教授）によって報告された。）

（日本キリスト教教育学会・原理的基礎研究部会における研究発表

[於：国際基督教大学 2014 年 6 月 14 日] の内容をもとに作成。)

### 参考文献

深谷 潤 『現代プロテスタント・キリスト教教育理論の変遷 ―キリスト教教育哲学の視座から―』 中川書店 2013 年

西南学院大学人間科学部児童教育学科